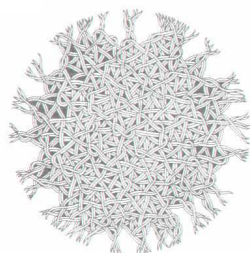


吉行淳之介

人工水晶体

講談社



吉行淳之介

人工水晶体

じんこうすいしょうたい
人工水晶体

一九八五年七月二十日 第一刷発行

著者——吉行淳之介

© Junnosuke Yoshiyuki 1985 Printed in Japan



発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京〇三—五五—二二（大代表）

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一〇〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-202275-3(0) (文1)

人工水晶体・目次

人工水晶体 7

移植手術体験記

淳之介「養生訓」 49

1・病気の愉しみ 51

2・不思議な病気 58

3・喘息の飼い馴らし法 64

4・お医者さまとの相性 70

5・喘息魔S博士の魅力 76

6・禿と公傷 82

7・傷と痛みについて 88

8・死に方にたいする希望	94
9・天使たち	100
10・「中」が五枚になる病氣	105
11・荒鷺の歌と避病院	111
12・色氣のある話	117
13・心臓とペニスと抑鬱症	123
14・「もしも」と寿命	129
15・厄介なふしぎな時期	135
16・病氣見舞ということ	140
17・人間最後の言葉	145

「権威」について 151

「淳之介を殺さないで」対談・島村喜久治 167

*清瀬はタメになった 169

*医師にかかる上手な方法 174

*撲滅できた結核 179

*安楽死一秒前 184

あとがき 191

人工水晶体

装丁 前川 直

人工水晶体

——移植手術体験記——

水晶体に出来た白髪

昭和五十一年の十月、眼の具合がなんとなく悪くなった。その一年間、辞書を数え切れないくらい引いて小さい活字を見てきたせいで、眼が疲れたのだろうか。私は五十二歳だった。

近くの国立第二病院へ行つて診察を受けると、すでに両眼とも白内障になっていて、左目は右目より半年遅れの発病である、という診断だった。

思いがけぬことで、私としては、

「単なる眼精疲労で、放っておけば治る」

という答を予想していた。

いや、あとで考えると、「予想」していたのではなく「期待」していたので、異変を心の底のほうでは感じ取っていたようだ。そうでなくては、混雑している病院にわざわざ出かけた意

味が分からない。ちょっとしたことでは病院へ行くことを、私はしない。

「眼の酷使は関係ありますか」

と、質問すると、

「ありません。これからいくら使っても構いません。眼の水晶体の白髪しろがというように考えてください」

そういう意味の答であった。

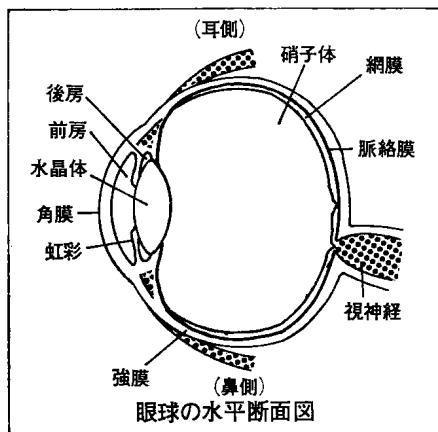
たしかに、白髪が痛くないように、その後も眼が痛かったことはない。しかし、その時の検査で〇・七だった右目の視力が、しだいに落ちてゆき、一年後には〇・二になり、そのあとも進行しつづけた。

一方、一・〇あった左目の視力は〇・七あたりまで下ってそこで止まったので、左目だけで仕事をする事になった。

「眼というのはな、一つあればいいんだ」

と言っていたが、何年も経つうちにしだいに困難を伴いはじめた。

ここで、「白内障」について簡略に書いておこう。



カメラを一台、思い浮べてもらいたい。その全体を眼球と考えれば、眼底にある「網膜」はフィルムであり、「水晶体」がレンズに当る。このレンズが濁ってくれば、当然フィルムの感光は悪くなり、全部が白濁すれば影像を映せなくなる。しかし、一部分だけの变化ならば、ほぼ支障の起らない場合もあるわけだ。ついでに書けば、水晶体の前にある「虹彩」は、紋りに

当る。

水晶体がこのように白濁してくるのを、「白内障」という。これは老化現象によるものが多いが、老化を阻む方法がないのと同じく、白内障にも薬による治療法はない。これを解決するためには、手術に頼るしか方法はない。そして、この手術の新しい方法が「人工水晶体移植」なのである。

私としては、発病、その後の八年間のあいだのいろいろ、手術、と順を追って書いていきたい。その八年間には、書くに値する問題がたくさんある。し

かし、白内障になっている患者は、「人工水晶体（眼内レンズ）」について知ることを急いでいる筈である。

昭和五十九年の年末に近い日、武蔵野赤十字病院の手術室に入る。

清水公也医師の執刀で、「人工水晶体移植手術」を受けた。

このあとは、その清水先生が手術について書いた新聞の記事を部分引用しながら、しばらくは話を進めることにする。

その記事というのは、昨年の夏に地方紙に三回連載になったもので、ある人がコピーして送ってくれた。そのコピーを、私は三ヵ月間ヒキダシに入れたままにして、読まなかった。そして、読んだときには大層感心した。

なぜ、私が読まなかったか。なぜ、読むことになったのか。どういう具合に感心したか。それを書くのは後にまわす。

『手術前には注射などはありませんが、手術の一時間前から看護婦が点眼を始めます（吉行註、食事ヲ抜クノハ当日ノ朝ト昼ダケ）。十五分前に手術室に入り、手術台に横になります。眼の周囲の消毒後、下まぶたに麻酔の注射を一本だけ受けます。この注射は少し痛いかもしれませんが、歯

科での注射と同じぐらいか、それより少し楽です（註、ソノトオリデアッタ）。その後は、手術が終るまで痛みを感じる人はほとんどいません。注射は手術の前後を通じてこの一本だけです。

手術は手術顕微鏡を用い、正確に安全に行います。黒目（かくもく角膜）と白目（きやうまく強膜）の境界を切開し、そこから白内障の核を超音波で吸い出します。普通は三ミリ切開しますが、人によっては（例えばほとんど見えなくなるまで手術を受けなかった場合など）九ミリ切開し（註、私ノケースハコレニ当ルガ、六・五ミリノ切開ダッタ）、そこから濁った白内障の核を取り出します。その後、茶目（虹彩）の下で、もともと水晶体のあったところに人工水晶体を移植します。最後にこの切開したところを非常に細い糸で縫います。手術に要する時間は約二十分です（註、私ノ場合ハ二十四分ダッタ）。

手術後はすぐに病室に戻って、食事を取り新聞やテレビを見たりしてもかまいません。一人で手洗いくなど、身の回りのことも普通にできます』

新しい手術の噂

話を最初に戻して、私を白内障と診断した医師は言った。

「手術はまだ先のことですから、半年くらい経ったらきてみてください」

そして、付け加えた。

「治療薬はないけれど、進行を止める薬を出しておきますから、薬局で取っていただくさい。この薬は個人差があつて、効くとはかぎりませんが」

当然、私は憂鬱だった。これまでいろいろの病氣をしてきて、苦しかったり痛かったりした。白内障は痛くはないし、今のところさしせまったものではないにしても、この上また新しい病氣を背負い込むことになるのか、という情なさが強かった。眼で苦労したことは、これまでに一度もなかった。見え過ぎるくらい、よく見えていた。

病院で貰ったピンクの点眼液は、間もなくなくなった。病院まで行って、薬局の前で長い時間待つのは一仕事である。容器に「カタリン」という文字があつたので、近所の薬局へ行つて取り寄せてもらえるかどうか、訊ねてみることにした。

その小さな薬局では、「カタリンという……」と言っただけで用件は片付いた。店の主人は、すぐうしろの棚から小さな箱をつまみ上げて、無造作に私の前に置いた。呆気ない気分になつたが、「これでは、白内障の患者はずいぶん沢山いるのだな」ともおもつた。